人文論叢（三重大学）第25号　2008

# 『テアイテトス』（184-186）における知覚と思考

今　泉　智　之

**要旨**：本稿では、『テアイテトス』第一部の、テアイテトスが提出した「知覚が知である」という第一の定義が最終的に論駁される議論において、知覚と思考、考察などの働きがどのように関係しているかについて検討する。知覚にもある種の思考、考察の働きを認める解釈は論拠に乏しく、知覚と思考、考察の能力は区別しなければならないことが示される。

## はじめに

『テアイテトス』は「知（ἐπιστήμη）とは何か」を主題にした著作である。その第一部では、テアイテトスが提出した「知覚（αἴσθησις）が知である」という第一の定義が論駁されている。本稿で主に取り上げるのは、その末尾で、認識を行う際に知覚と思考、考察などの働きがそれぞれどのような役割を果たすのかが論じられている箇所（184-186）である。この箇所について議論されてきたことの一つに、ここでプラトンは知覚にも思考や考察など働きを認めているか否か、という問題がある。本稿では、これまでになされてきた主な研究を踏まえながら、『テアイテトス』の当該箇所の、とくに解釈上の問題が多い二つの問答（185b-e）を検討することで、知覚と思考、考察の関係を考え、あわせて、その問答がもつ意義を示したい。以下では、はじめに当該の議論の概要を確認し（1）、知覚にも思考や考察の働きを認めるべき否かを検討する（2）。次に、二つの問答のうち第一のものに関して出されている修正案の妥当性を吟味したうえで（3）、二つの問答がどのような関係にあるかを考察し、当該の議論のなかで二つの問答がもつ意義を明らかにしたい（4）。

## 1　議論の概要

まず、184-186 の議論の概要を見ておきたい。そこではまずはじめに、知覚と思考、考察の役割が対比される。すなわち、われわれは目、耳などの器官（ὄργανον）、あるいは視覚、聴覚などの能力（δύναμις）を通して（διά）知覚を行うのであるが、それぞれの知覚には色、音など対応する固有の領域がある。他方、色と音について、その〈ある〉〈あらぬ〉や、その双方が互いには〈異なる〉が自分とは〈同じ〉、双方では〈二〉だが、それぞれは〈一〉ということ、さらに〈奇数〉〈偶数〉などのことを思考し（διανοεῖσθαι）、また双方は互いに〈似ている〉かそれとも〈似ていない〉かを考察する（ἐπισκοπεῖν）のは、魂自身が自分自身を通してである。こうした〈ある〉〈あらぬ〉、〈同じ〉〈異なる〉などは、あらゆる知覚対象に適用されるので（185c4-5, e1）、〈共通のもの（τὸ κοινόν, τὰ κοινά〉（185b8, c4-5, e1）と呼ばれる（184b4-186a1）。

次に、魂が自分だけ独立で（καθ'αὑτήν）把握する〈共通のもの〉との連関で〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉が引き合いに出されるが（186a8）、〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉の〈ある〉を魂は、

過去と現在を未来に向けて自分自身のなかで勘案しながら（ἀναλογιζομένη）、相互に関係させて考察すると言われる（186a9-b1）。続いて、一方で人間も動物も本来生まれるとすぐ知覚できるものがあり、それは身体を通しての経験（παθήματα）として魂へ届くが、他方、そうした経験について、〈ある〉と有益性を勘考すること（συλλογισμός）は、かろうじて長い時間をかけて多くの苦労と教育を通して人間に備わることもある、と主張される（186a2-c6）。

以上を踏まえて、議論は次のように結ばれる。すなわち、〈ある〉に到達できない人は〈真理〉にも到達できず、そうだとすればその人は、何かについて知っていることにはならない。そして身体を通しての経験のうちにではなく、むしろそれらについての勘考のうちに知は存するのであり、人が〈ある〉と〈真理〉を把握しうるのはその勘考の際である。したがって、知覚は〈ある〉を把握しない以上〈真理〉も把握せず、それゆえ知にも与らないのだから、知覚と知が同一であるということにはならない（186c7-e12）。

見られたようにこの議論では、色、音などを認識する知覚の働きと、知覚が捉えた色、音などについて〈共通のもの〉を把握する思考、考察、勘案、勘考などの能力が対比されている。そのため、知覚には〈共通のもの〉を捉えることができないとすると、知覚は思考、考察などの能力とどのような関係にあるのかということが問題になる。これに関しては、大きく分けると次の二通りに整理することができる（cf.Kanayama, 33ff.）。

(1) 思考や考察は知覚の働きに含まれる。
(2) 思考や考察の際に知覚の働きは用いられるかもしれないが、思考や考察は知覚の働きとは異なる。

そしてこの問題を考える際とくに検討しなければならないのは、この議論において〈共通のもの〉が導入される場面における次の二つの問答である。

【第一の問答】
ソクラテス「その双方〔色と音〕が塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉かを考察することができるとしたら、それを考察するのは何によってなのかを、もちろん君は言うことができるだろう、すなわち明らかにそれは視覚でも聴覚でもなく、何かそれ以外のものなのだ」（185b9-c2）。
テアイテトス「もちろん、舌を通しての能力です」（c3）。

【第二の問答】
ソクラテス「君の答えは見事だ。しかしそれに対して、これら〔色と音〕に加えて、それ以外のすべてのものにも〈共通のもの〉を君に明らかにするのは、何を通しての能力なのであろうか。その〈共通のもの〉に君は、〈ある〉〈あらぬ〉や、ちょうど今のわれわれの問いのなかで用いてきた名を当てるのだが。それらすべてに、君はどのような器官を割り当てるのだろうか。その器官とは、それを通してわれわれのうちの知覚する部分がそれぞれのものを知覚する、というものなのだが」（c4-9）。

…中略…

テアイテトス「いや、神に誓ってソクラテス、それを私は言うことができないでしょう。ただ、

知覚されるものにはそれぞれに対応する器官がありますが、こうした〈共通のもの〉には、それと同じような固有の器官は、もともと何もないように私には思われます。むしろ魂自身が自分自身を通して、すべてのものについて〈共通のもの〉を考察するように私には見えるのです」(185d6-e2)。

以下では、この二つの問答をめぐる諸解釈を主に検討したい。

## 2　知覚と思考、考察の関係

知覚と思考や考察の働きがどのような関係にあるかについて、現在の研究動向に大きな影響を与えたのは Cooper の解釈である。そこで、まず Cooper の見方がどのようなものかを簡単に確認しておく必要がある。

Cooper によれば、この議論で述べられている魂の独立した活動、すなわち、魂が自分自身を通して〈共通のもの〉を思考、考察することは、知覚が認識した対象に〈共通のもの〉を適用することであり、その際魂は知覚対象について〈ある〉などの判断を行っている。すなわち、思考などの働きは、〈ある〉を含めた〈共通のもの〉を知覚対象に適用して、それを〈同じ〉〈異なる〉、〈似ている〉〈似ていない〉などと分節化して把握している。そこには反省の働き (reflection) が含まれている。他方、そうした働きと対比される知覚に関しては、Cooper は次の二通りに解釈が可能であるとした。つまり、知覚とは (A) 対象についての単なる感覚的な気づき (sensory awareness) なのか、それとも (B) そうした感覚的な気づきに加えて、色、音などを「赤い」「大きい」などと見なす働き (labelling) まで含むのか、のいずれかである。Cooper は、知覚はここではこのうちどちらに解すべきか明確にされてはいないとしながらも、自身は (B) に傾いた解釈を示した。ただし Cooper は、この場合でも知覚の役割は対象を直接的に把握することだけ、つまり、たとえばある対象の色を単に読みとることだけであり、思考などのように分節化して把握する能力は含んでいないと考えた[1]。

この Cooper の解釈では、知覚が認識した色、音などについて反省を加え、〈同じ〉〈異なる〉などと分節化する働きは思考、考察などにだけ備わっていると考えられている。それに対して知覚は、それを (A) 気づきと捉えるにしても、あるいは (B) labelling と見なすにしても、対象を直接的に把握するものである。ただし、知覚を (B) として理解すると、思考や考察との違いが微妙になり、そのため、知覚を先の (1) のように解釈する余地が生ずることになる。たとえば Cooper は、先に見た知覚と思考、考察との間の区分けに関連して、「知覚のために魂を用いること (the perceptual use of the mind)」と「反省・判断のために魂を用いること (the reflective-judgmental use of the mind)」を区別している。しかし他方、知覚している際にも、人は明確な仕方ではないにしても反省、記憶、比較などを行っている、と述べている。すなわち、ある色を赤として認識するためには、以前に経験した赤と赤でない色を思い出して、この色は前者には〈似ている〉が後者には〈似ていない〉ということを思考する必要がある、というのである。ただし Cooper によれば、知覚の際になされるこうした思考は「明確ではない (implicit)」のに対して、ある色が〈ある (存在する)〉、自分とは〈同じ〉だが、自分以外のものとは〈異なる〉などと把握するのは「明確な (explicit)」思考である。プラトンが指摘しているのは、思考にもこの二つの区別があるということだという。つまりこの解釈

によれば、「明確な」思考は〈ある〉を捉えるので知に至る可能性があるのに対して、知覚には「明確ではない」思考が含まれるかもしれないが、それは知となることはできない、ということがこの議論で示唆されていることになる。すなわち、知覚を（B）のような働きと見なすと、知覚は、「明確ではない」にしても、ともかく思考の働きを含むことになるので、先の解釈（1）のように捉えることにつながるわけである（cf.Cooper, 130-134）。

そして当の問答に関して、（1）の解釈の可能性をよりはっきりと打ち出しているのは、Cooper の考えを基本的に支持している Modrak である。Modrak は次のように述べている。「何かが塩辛いかどうかという問いを考察するのは知覚の働きであり、したがって、その問いに答えるのもまた知覚の働きでなければならない」（Modrak, 43）。

しかし、結論から述べると、第一の問答に関して知覚をこのように解釈することについては疑問が生じざるをえない。というのはまず、第一の問答のなかのソクラテスの問いにおける条件文は、しばしば事実に反する仮定と見られているからである[(2)]。その見方が正しいとすれば、プラトンはここで、味覚が色や音が塩辛いかどうかの考察を行うことは実際にはありえないものとして記述していることになり、この問答に即して解釈（1）を採ることはそのままでは受け入れがたいことになる。すなわち、この文章を非現実の仮定と解するならば、解釈（2）を採るのが自然である。

次に、かりにこの条件文が非現実の事態を想定しているとは解さないとしても、（2）の解釈を支持することはできる。すなわち Kanayama によれば、前件に希求法が、後件に直説法の未来が用いられているこの条件文は、仮定の真理性に関して、話し手ソクラテスの考えを何も含意してはいない。しかしそうだとしても、この箇所を次のように理解すれば、解釈（2）を採ることが可能になる。すなわち、明確に思考がなされることは、問いを立てるという働きを前提もしくは含意しているが、現に思考する際に人がさらに進んで関与することはできないような性質の問い「色と音は塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉か」がある。なぜなら、色や音の塩辛さを吟味する方法はないからである。しかしそうだとしても、そうした問いそのものを明確に立てることは可能である。ソクラテスの曖昧さは、明確な思考の働きにはこれら二つの段階もしくは相が含まれることに由来するのである。この Kanayama の解釈では、「色と音は塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉か」という問いを立てること自体は可能だが、味覚がその問いを実際に考察するわけではないと考えられており、したがって、解釈（1）を採る必然性はないことになる[(3)]。

さらに言えば、Cooper による知覚の説明にも問題があるように思われる。先に見たように Cooper は、色、音などを「赤い」「大きい」などと見なす働き（labelling）まで知覚が含むとすると、知覚は、「明確ではない」にしても、ともかく「思考」を行っていることになると解していた。そして、それは解釈（1）を採っていると見なされうる。しかし、少なくとも当該の議論において、知覚の働きを説明する際、Cooper が述べている、以前に経験した赤と赤でない色を思い出して、この色は前者には〈似ている〉が後者には〈似ていない〉ということを思考する、というような事例は挙げられておらず、テキストに書かれていないことを読み込んでいる疑いがある。冒頭で見たように、視覚、聴覚などの知覚は色、音などそれぞれに固有の領域で働くものであり、〈共通のもの〉である〈似ている〉〈似ていない〉はそれと対比させる形で、色と音が互いに〈似ている〉か〈似ていない〉かを考察する、のように、主語が複数の知覚領域にわたる場合に、それをまたがる述語として導入されていたのである（185b4-6）[(4)]。

## 3　テキストの修正案について

以上において、当該の議論に関して知覚と思考や考察の関係をどのように捉えるのが妥当かという問題を検討し、知覚は思考、考察とは異なる働きとして理解すべきことを論じた。先に見たように、Kanayama もこのように解釈している。しかし Kanayama はその際テキストの修正を提案しているので、ここでその点にもふれておきたい。すなわち Kanayama は、第一の問答のなかの「それを考察するのは何によってなのか」という疑問文における与格「何によってなのか（ᾧ）」の用法は正確ではないとして、それを「何を通してなのか（δι' οὗ）」と改めるべきと主張しているのである（Kanayama, 39-40)。そしてこの修正案の背景にあるのは、この議論における「…を通して」と「…によって」の使い分けについての Burnyeat の解釈である。この点では、ソクラテスの次の発言が重要である。

かりに、ちょうど〔トロイアの〕木馬のようなわれわれのなかには多くの知覚する能力が伏しているが、そうした能力すべてが何か一つの形――それを魂と呼ぶべきであるか、あるいは何か他の呼び方をすべきであるとしても――へと向かっていくことはないのだとするならば、確かにそれは恐ろしいことなのだ。その一つの形とは、それによって、われわれが知覚できる限りのものを知覚するものなのであるが、その知覚は、ちょうど器官を通してのように、知覚する能力を通して行われるのである（184d1-5)。

Burnyeat によれば、この箇所で「…を通して」という前置詞は、知覚する能力もしくは器官を示すために、他方「…によって」という与格の表現は、知覚する主体としての一なる魂を示すために用いられている。すなわち「…によって」という与格は、知覚の主体である魂の働きを示唆するものである。それに対して、「…を通して」という言葉で示されている視覚、聴覚などの知覚する能力、もしくは目、耳などの器官は、その一つひとつが知覚を行う主体なのではない（Burnyeat（1976）;（1990）, 53-55)。この解釈のポイントの一つは、「…を通して」という前置詞を用いて表される知覚そのものには認識主体としての役割を帰すことはできず、認識の主体は「…によって」という表現で示されている魂である、と考えることにある。知覚の能力もしくは器官は、あくまで外界と認識主体としての魂を媒介するにとどまるのである[5]。

Kanayama が先のようなテキストの修正を提案するのは、Burnyeat がこのように、「…によって」という与格は認識の主体である魂の働きを示唆するものである、と主張するのを踏まえてのことである。なぜなら、「…によって」という与格表現が認識の主体を示しているとするならば、第一の問答における「色と音が塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉かを考察することができるとしたら、それを考察するのは何によってなのか」という問いでは、「考察」の主体が問題にされていることになり、その問いに「舌を通しての能力」（味覚）と答えるのが正しいとするなら、ここでは味覚が「考察」の主体として認められていることになるからである。それは解釈（1）を採ることにつながる。そこで Kanayama は、第一の問答における「考察する」の文法上の主語はテアイテトスだとしても、テキストを先のように修正したうえで、意味上は主語として魂という語を想定して、この部分は「魂が舌の能力を通して考察する」と理解するのが正しい、と主張している。そしてそのことによって、知覚にも思考、考察する働きを帰する解釈（1）が排除されることになるのである。

しかし、テキストをこのように修正することには多少抵抗がある。というのは、当該の議論の冒頭において、人は「目によって」白いものや黒いものを見、「耳によって」高い音や低い音を聞くという言葉遣いは正しくないとして、「目を通して」見、「耳を通して」聞くと改めなければならないとソクラテスがはっきりと指摘しているからである（184c7-9)。先に引いた、魂「によって」、知覚の能力もしくは器官「を通して」知覚する、というソクラテスの発言は、この指摘を踏まえたうえで述べられたものである。そうだとすると、この二つの用語の対比に正確であるべき当該箇所の第一の問答において、Kanayama が指摘しているような書き違えをプラトンがしたとは考えにくいように思われる。

では、Burnyeat の解釈を受け入れながら、ソクラテスの問いにおいて「何によってなのか」という与格による表現が使われていることの意味を、第一の問答のテキストに修正を加えずに読みとることはできるであろうか。

第一の問答の直前では、色と音について、その〈ある〉〈あらぬ〉、その二つは互いには〈異なる〉が、自分とは〈同じ〉、また双方では〈二〉だが、それぞれは〈一〉だということ、またその双方は互いに〈似ている〉か〈似ていない〉かなどを捉えるのは思考、考察などの働きだということがソクラテスとテアイテトスの間で同意された。そのうえで、視覚や聴覚「を通して」は把握できないこうした〈共通のもの〉を思考するのは、何を通してなのかという問いが立てられ、その問いを考えるための証拠になるものとして（185b9)、まず第一の問答が語られる。ここであらためて注意する必要があると思われるのは、第一の問答の事例においては、主語はその直前の例と同様に色と音であるが、述語が「塩辛い」という、通常では色や音に述定されるとは考えられない性質だということである。そこでは、視覚と聴覚に加えて、味覚の働きも関わる可能性がある。それに、それ以前は〈共通のもの〉は述語として立てられていたが、この場合（〈ある〉〈あらぬ〉）は主語である色と音と、「塩辛い」という述語を結びつけるコプラの役割を担っている。するとこの事例では、色と音が〈ある〉〈あらぬ〉、その二つは互いには〈異なる〉が、自分とは〈同じ〉などのことを思考する場合以上に、視覚、聴覚、味覚というそれぞれの知覚能力を統一して把握し、かつ、〈共通のもの〉である〈ある〉〈あらぬ〉を捉えて思考や考察を行うものが必要とされていると考えられる。そうでなければ、それぞれの知覚が別々に働くことになりかねず、それは先の引用にあるように「恐ろしいこと」だからである。すなわち、第一の問答で取り上げられる例ではとくに、認識の主体である魂の一性が強く求められる。そして認識主体としての魂の関与が、「…によって」という表現によって端無くも示されているのではないであろうか。

もとより、以上の読み方が完全に正しいと言い切れるわけではないことも認めなければならない。率直に言って第一の問答は、その内容と用語の両面において曖昧な点を含んでいることは否定できず、その正確な意味を読み取ることは困難である。だからこそ、すでに見たような様々な解釈やテキストの修正が提案されてもいる。しかし、以上のような理解の仕方もまた一つの可能性として許されるとするなら、第一の問答を読む際テキストに修正を加えなくとも、「舌を通しての能力」すなわち味覚には思考や考察の働きは含まれないとする立場を採り、味覚などの知覚と思考や考察の働きを区別することはできることになるかもしれない。認識を行う際、知覚と思考、考察などが同時に働くことは十分に考えられることである。しかしだからといって、知覚そのもののうちに思考が含まれるということには必ずしもならない。思考や考察は、〈同じ〉〈異なる〉などと対象を分節化して把握するものであり、知覚にその働きは含

まれないと見なすのが、先にも述べたように妥当な理解だと思われる[6]。

ここであらためて、第一の問答をどう理解するかというこれまで検討してきた問題を簡単に整理すると、次のようになる。まず、その条件文を事実に反する仮定と見なす読み方では、「舌を通しての能力」が現実に「色と音が塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉を考察する」ことはありえないことになるので、解釈 (2) が支持される。他方、この文は必ずしも事実に反する想定をしているわけではないとする Kanayama の解釈では、ここでは思考の働きには、先に見たような二つの段階もしくは相が含まれると見なされることになる。この解釈でも結局解釈 (2) が採られることになるが、テキストの修正を伴っている。これに対して、以上に述べたことを踏まえれば、テキストに修正を施さなくても、知覚には思考や考察の働きは含まれないという解釈を採ることはできるかもしれない。ただしそのことは、魂が思考や考察を行っている際に知覚が働いていることを必ずしも排除するものではない。

## 4　二つの問答の関係

ところで当該の二つの問答の意味を理解するためには、両者がどのように関係しているのかということも検討する必要がある。この点で問題になるのは、第二の問答のなかでソクラテスが「しかし、それに対して」と述べているのは、第一の問答と何を対比させてのことなのかということである。

これに関して、Kanayama はおよそ次のように述べている。すなわち、第一の問答における「その双方〔色と音〕は塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉か」という問いにおいては、知覚の能力を通しての思考だけでなく、〈共通のもの〉の把握に関わる魂自身の思考も描かれている。ここで魂は「塩辛い」および〈ある〉〈あらぬ〉という二つの概念を扱う際に、二つの手段「味覚」と「魂自身」を用いている。ソクラテスが第一の問いを導入するとき、テアイテトスの注意は自然に、塩辛さを扱うための手段へと向けられることになる。そのためテアイテトスは「舌を通しての能力」と答える。そこで、続く第二の問答でソクラテスは、テアイテトスの注意を、思考の働きには〈共通のもの〉が含まれるということと、こうした〈共通のもの〉を使用する際に必要な手段〔魂自身〕、この二つのことに向けている。第一の問答と第二の問答では、思考の働きが遂行される際に用いられる二つの手段、すなわち味覚などの知覚と魂自身が対比されているのである (Kanayama, 41)。

ここで、第一の問答と第二の問答の関係を考えるために、もう一度論の運びを簡単に確認しておきたい。まず第一の問答においては、「色と音が塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉か」を考察するのは、「舌を通しての能力」(味覚) であるとされた。しかし、その考察には〈共通のもの〉である〈ある〉も含まれており、魂も関わっている。そのことが「…によって」という与格の表現によって暗に示されている。続く第二の問答では、話題の中心が、〈ある〉を含む〈共通のもの〉の把握に移っている。〈共通のもの〉は「魂自身が自分自身を通して」考察するものである。これは言い換えるならば、その把握には身体に帰属する働きは必ずしも伴うわけではないということである。そうだとすると、第一の問答と第二の問答では、Kanayama の言うように、思考の働きが遂行される際に用いられる二つの手段、すなわち味覚などの知覚と魂自身も対比されているかもしれないが、それに加えて、知覚と思考や考察がともに働いて認識を行う場面と、魂だけが思考や考察を行う場面もまた対比されているように思われる。

こうした理解は、これまで検討してきた二つの問答についてのソクラテスのまとめの言葉と、それ以降の議論の流れも裏打ちしてくれるのではないであろうか。ソクラテスは第一の問答と第二の問答の対比を次のように要約している。

もし、一方のものは魂自身が自分自身を通して考察し、他方のものは身体の能力を通して考察するように君〔テアイテトス〕に思われるならば、…君は親切にも私をこれまでのとても長い議論から解放してくれたことになる（185e5-7）。

このソクラテスの発言のうち、「一方」以下は第二の問答を、「他方」以下は第一の問答を受けている。前者が魂だけで行う考察であり、後者は魂が知覚の能力や器官を通して行う考察であるが、「考察する」という動詞の主語・主体はいずれの場合も魂であるから、魂は双方の場合に関与していると考えなければならない。すると両者の違いはむしろ、魂による考察の際、身体に帰属する知覚の能力もしくは器官も同時に働いているか否かという点に存することになる。そしてこれ以降（186a2 ff.）に話題の中心になるのは前者、すなわち魂だけによって把握されるものの検討であり、テアイテトスが提出した「知覚が知である」という定義の論駁に重要な意味をもつことになるのが、このように身体が直接は関わらない認識の働きなのである。その証拠にこの後、議論のなかで魂そのものの働き、魂の内省ということがくり返し述べられることになる。すなわち、まず〈共通のもの〉の一つである〈ある〉には「魂が自分だけ独立で（καθ' αὑτήν）到達する」ことが確認される（186a2-5）。次に〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉の〈ある〉を魂は、過去と現在を未来に向けて「自分自身のなかで（ἐν ἑαυτῇ）」勘案しながら相互に関係させて考察すると言われる（186a9-b1）。さらに、硬さや軟らかさの〈ある〉や、その二つが互いに〈反対であること〉などへは「魂自身が赴いて（αὐτῇ ἡ ψυχῇ ἐπανιοῦσα）、相互に比較しながら判別を試みる」とされる（186b6-9）。ソクラテスはそれを踏まえて、身体を通しての経験（παθήματα）のうちにではなく、むしろそれらについての勘考（συλλογισμός）のうちに知は存し、人が〈ある〉と〈真理〉を把握しうるのはその勘考の際であることを指摘する。そのうえで、知覚は〈ある〉を把握しない以上〈真理〉も把握せず、それゆえ知にも与らないのだから、知覚と知が同一であるということにはならないとして、テアイテトスの定義は論駁されるのである（186c7-e12）[7]。

そして、先に引用した、二つの問答についてのソクラテスのまとめの言葉以降、話題が魂自身の把握するものに移っているという見方は、この場面で導入される〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉の性格に着目することでも裏づけられると思われる。この〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉は、第1節冒頭で見たように未来との関連で言及されているため、177c-179d の議論との連関がしばしば指摘されている（Cooper, 142 ; Kahn, 124 ; Kanayama, 70 ; Sedley, 109）。すなわち 177c-179d においては、未来における発熱の有無、酒の旨さ・まずさ、音の調和・不調和などについては、それぞれ医者、酒造りをする農夫、音楽家など専門家の判断のほうが、素人の判断よりは優れていると主張されている。しかし、注意しなければならないのは、この主張と当該の議論との間には、次のような違いもあるということである。まず当該の議論では、177c-179d において引き合いに出される、酒の旨さ・まずさ、音の調和・不調和のような特定の領域における善・悪ではなく、端的に〈善〉〈悪〉や〈美〉〈醜〉に言及している。また当該の議論では、177c-179d とは異なり、医者、農夫、音楽家などの専門家には触れていない。さらにそうした

端的な〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉の〈ある〉の考察の際に働く「勘案」は、「かろうじて長い時間をかけて多くの苦労と教育を通して、それが備わる人がいるとすれば、その人には備わる」(186c2-5) と言われている。この言い方は、実質的には否定の意味合いが濃い。これらの点は、ここでの〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉は、酒の旨さ・まずさ、音の調和・不調和など、専門家が経験的に把握する特定の領域の善・悪ではなく、より高度な、いわば哲学者が探求する〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉を指し示していることを意味していると考えられるのである[8]。そしてもしこの理解が正しいとすれば、この点からも、当該の議論においては、身体に属する知覚の能力もしくは器官を通して行う認識から、魂自身を通して行う認識へと論点が推移していることが裏づけられると思われる。

このように見てくると、これまで検討してきた二つの問答は、当該の議論のなかで、認識するために身体に帰属する能力もしくは器官が必ずしも必要ではないものがあることをテアイテトスに認識させるという意義をもっていると言うことができる。そのなかでも、第一の問答における「色と音は塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉かを考察することができるとしたら、それを考察するのは何によってなのか」という問いは、そのことに最初に気づかせる役割を担っていると見られる。この問いを非現実の仮定と見なすかどうかという問題は措くとしても、この事例は、通常知覚を行っている場合には考えられにくい特異な問題を提起していることは確かである。それが契機となり、〈ある〉〈あらぬ〉を含めた〈共通のもの〉を魂はどのように把握するのかという問題に論点が移行していく。その問題に対するテアイテトスの答えが、「魂自身が自分自身を通して」考察する、というものであり、そう答えることによってテアイテトスは、「知覚が知である」という自分が提出した定義を結局否定せざるをえなくなる。ソクラテスはテアイテトスからこの答えを引き出すために、いったんこうした現実離れした問題を立て、認識の際魂そのものが果たしている役割にテアイテトスの注意を促しているとも考えられる。そうだとすると、第一の問答でとられている事例は、テアイテトスの定義を論駁するために周到に選ばれたものかもしれないのである。

以上において、『テアイテトス』の当該の議論における二つの問答をどう読み解くべきかを検討しながら、知覚にもある種の思考や考察の働き帰する解釈は論拠に乏しく、知覚と思考、考察は区別すべきであることを論じた。またあわせて、その二つの問答は当該の議論のなかで、認識するために身体に帰属する能力もしくは器官が必ずしも必要ではないものがあることをテアイテトスに認識させるという役割をもっていることを示した。身体に帰属する知覚の働きと、優れて魂に帰属する思考、考察などの能力を区別し、後者を重視するのは、『パイドン』『国家』などのプラトン中期の著作で示された見方であるが、その見方は、一般にプラトン後期の始まりに位置するとされる『テアイテトス』においても保持されていると考えるのが妥当だと思われるのである。しかし『パイドン』『国家』などの中期の著作と、後期の始まりに位置するとされる『テアイテトス』における議論との関係をどう考えるかについては、すでに様々な解釈が提出されている。その詳しい検討は今後の課題としたい。

## 注

(1) cf.Cooper, 126-134.Cooper に先立ち Cornford, 108 は、ここでの主張は、「ここに緑が

〈ある〉」のような最も単純な判断すら、知覚に固有の領域、すなわち緑についてのわれわれの直接の気づき（our immediate awareness of green）を超えているという意味である、と述べていた。他方 labelling とは、Cooper, 130, 132 によれば、色、音などに「赤い」「大きい」などの名を付けること、あるいは分類すること（classification）である。

(2) この読み方は、Cornford, 104;McDowell, 67;Holland, 103;Burnyeat（1976）, 48, n.57;Polansky, 168 などが採用している。

(3) Kanayama, 33-34 は、Goodwin, 168 を引いて、この条件文をこのように理解している。この形は、Smyth が less vivid future condition と分類しているもののの変形である。通常は前件が ἐ ἀ ν＋接続法になる。cf. § 2359 ff. § 2361a によると、プラトンにおける類例は『メノン』80d;『パイドン』91a;『法律』658c などに見られる。

(4) テキストでは、硬さや軟らかさの〈ある〉や、その二つが互いに〈反対であること〉などへは、魂自身が赴いて、相互に比較しながら判別を試みる、と言われている（186b6-9)。この場合、判別（κρίνειν）は魂に帰属する働きであり、知覚に帰属するわけではない。またこの事例も Cooper の用いている例とは異なる。なお、Cooper や Modrak の解釈では、知覚〔が行う判断〕が誤りえないものと見なされる可能性がある。cf.Cooper, 142;Modrak, 40.Shea は、この二人に共通するこうした傾向はプラトンを現象主義者として解釈するもので、それは知覚は真理を捉えないというソクラテスやプラトンの基本的な考え方に反するとして、批判している。cf.Shea, esp.4-6, 10-12.

(5) Burnyeat によれば、知覚を行うことは、外界との単なる「遭遇（encounter)」もしくは「通過させる働き（transaction)」にすぎない。cf.Burnyeat（1976), 36, 50.

(6) Burnyeat（1976), 41-42 も、第一の問答では「…を通して」と「…によって」の対比が崩れていることを認めているが、哲学的な内容が問題とならない限り、用語に厳密さを求めないのがプラトンの原則だとしている。また Burnyeat は、注（2）でふれたように、第一の問答を非現実の仮定と見なしているので、「…によって」のままでも問題はないことになる。なぜならこの文全体が非現実の仮定であるとするなら、味覚はいずれにしても考察を行うことはないとプラトンは考えていることになるからである。

(7) -μα[τα]という接尾辞は一般に行為の結果を示す。したがって、身体を通しての経験（παθήματα）についての勘考の際、知覚が同時に働いていると見なす必要はない。

(8) この点は、拙稿「『テアイテトス』（186c4）における「教育」の一解釈」、『人文論叢』（三重大学人文学部文化学科）第 22 号、2005 年、49-64 頁、で論じた。

## 文献表


Burnyeat, M.F.(1976), "Plato on Grammer of Perceiving", *Classical Quarterly N. S.* 26, pp. 29-51.

—— (1990), *The Theaetetus of Plato, with a Translation of Plato's Theaetetus by M. J. Levett*, Indianapolis.

Cooper, J. M.(1970), "Plato on Sense-Perception and Knowledge (*Theaetetus* 184-186)", *Phronesis* 15, pp. 123-146.

Cornford, F. M. (1935), *Plato's Theory of Knowledge*, London.

Goodwin, W. W. (1965), *Syntax of the Moods and Tenses of the Greek Verb*, New York.

Holland, A. J. (1973), "An Argument in Plato's *Theaetetus* 184-6", *Philosophical Quarterly* 23, pp. 97-116.

Kahn, C. (1981), "Some Philosophical Use of "to be "in Plato", *Phronesis* 26, pp. 105-134.

Kanayama, Y. (1987), "Perceiving, Considering, and Attaining Being (*Theaetetus* 184-186)", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 5, pp. 29-81.

McDowell, J. (1973), *Plato Theaetetus*, Oxford.

Modrak, D. K. (1981), "Perception and Judgement in the *Theaetetus*", *Phronesis* 26, pp. 35-54.

Polansky, R. M. (1992), *Philosohy and Knowledge : A Commentary on Plato's Theaetetus*, Cranbury.

Sedley, D. (2004), *The Midwife of Platonism : Text and Subtext in Plato's Theaetetus*, Oxford.

Shea, J. (1985), Judgment and Perception in *Theaetetus* 184-186, *Journal of the History of Philosophy* 23, pp. 1-14.

Smyth, H. W. (1956), *Greek Grammer*, revised by Messing, G. M., Cambridge Mass.